

## ハーフィズの「ナイチンゲールと薔薇」への影響

五 島 正 夫

### 序

「芸術のための芸術」(Art for art's sake) を、旗印にしてイギリス文壇にデビューしたワイルド (Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde 1854-1900) は詩人、小説家、劇作家、批評家と多彩な才能を示した。この「ナイチンゲールと薔薇」(The Nightingale and the Rose) は、1888年に出版された童話集『幸福な王子とその他の物語』(*The Happy Prince and Other Tales*) 中の一編である。子煩悩であつたワイルドは自作の童話を一編ずつ物語ったといわれている。それらの童話はワイルド特有の人生を皮肉に背後から眺めたアイロニーに満ちたもので、大人の童話ともいわれている。この論文ではナイチンゲールがイギリス文学の中でどの様に扱われて来たのかということと、ペルシアの抒情詩人ハーフィズ (Shams-ud-din Mohammed Hafiz ?1326-89?) のワイルドへの影響を述べてみたい。

まず、「ナイチンゲールと薔薇」の概要を示しておきたい。「[あのひとは僕が赤い薔薇を持っていったら、踊ってくれるといつた。]と学生が叫んだ。「だが、僕くの庭のどこにも赤い薔薇なんてありゃしない。」という貧しい学生の嘆きから始まる。

この学生を哀れに思ったナイチンゲールは赤い薔薇を一生懸命になって探す、どこにもない。手にいれる唯一の方法は月の光を浴び、歌を歌いながら、薔薇の棘にむねを押し付け、白い薔薇を自分の心臓の生き血で染めて、赤い薔薇をつくることだった。ナイチンゲールの唯一の願いは学生が本当の愛する人になることだった。そして薔薇が真紅なり花開いた時、ナイチンゲールは棘が胸に刺さったままで、長い草の中に、死んで横たわっていた。

窓の下に咲いている真紅の薔薇を見つけた学生は、その薔薇を摘み取り恋人の所に急いだ。だが恋人である娘は「私のドレスにはこの薔薇は似合わない。それに侍従の甥にもらった宝石の方がはるかに価値がある。」と言う。怒った学生は、その赤い薔薇を捨ててしまう。すると轍に落ちた薔薇は荷馬車の車輪に轢かれてしまう。」という現実と幻想の交錯した物語だ。

### ナイチンゲール

ナイチンゲールは、羽は赤茶けた色、腹は灰白色の小鳥で、姿は美しいとはいえないが、声は最も美しい鳥とされている。この鳥がイギリスにやって来るのは4月の中頃で雄は雌よりも数日前、古巣のあった所に到着し、雌を待っていて、共同で巣を作り、4から6個の濃い、オリーブ色の卵を産む。雄が美声で、昼夜鳴くのは4月中旬から5月中旬ごろまでで、若鳥と共に8月の下旬にアフリカに旅立つ。nightingale の名前はにnight+gale (<galan=sing) の意味で、夜間によく鳴くことからこう呼ばれたと言う。日本語では「夜啼鶯」とも書かれるが、鳴き方からむしろ「ほととぎす」のイメージに近い鳥である。この春を告げる鳥は、雛が孵ってしまうまで、日の暮れ方から夜にかけて歌う。また、まれに日中でも、その歌を聞かせることがある。その声は朗らかで、静かな夜には、遠くで鳴いているのが、手にとるように聞こえると言う。そして、その声を聞いていると実に楽しくて、心が踊り出すようであるかと思えば、たちまちのうちに、悲しみを感じさせ、歓楽の声と悲哀の声がその巧みな歌によってまだんなく流れてくると言われている。

英詩でナイチンゲールが歌われるようになったのは13世紀の後半からで、ギリシア・ローマ神話の影響だといわれている。この神話を概略すると、プロクネ (Procne) は、妹ピロメラ (Philomela) を犯した夫テレウス (Tereus) に復讐するために、夫との間に生まれたわが子イテュス (Itys) の肉を夫に食わせた。そしてテレウスの怒りを逃れて姉妹でアテネに逃げるとき、プロクネはナイチンゲールに、妹

ピロメラはつばめに変わり、夜ごとわが子を偲んで「イテュス、イテュス。(Itys, Itys)」と悲痛な声で鳴いたと言われている(ローマ神話ではプロクネはつばめに、ピロメラがナイチンゲールとなっている。)この神話からナイチンゲールの声は悲哀が強調された。また、ひばり、カッコウと共に暖かい春の使者としても詩に歌われている。

以上のように春の使者の歓楽の声と神話から来る悲痛な声を合せ持つナイチンゲールは、ミルトン(John Milton 1608-74)、シェイクスピア(William Shakespeare 1564-1616)、ブレイク(William Blake 1757-1827)、バイロン(George Gordon Byron 1788-1824)等の詩人達によって歌われ続けられている。ここでワイルドが大きな影響を受けている、キーツ(John Keats 1795-1821)の「ナイチンゲールによせるオード」(Ode to a Nightingale)から引用してみたい。

That thou, light-winged Dryad of the trees,	羽も軽やかな木の精よ
In some melodious plot	緑のふなの、歌響く所で、
Of beechen green, and shadows numberless,	数え切れない木陰の中で
Singest of summer in full-throated ease. <sup>1)</sup>	のど一杯に易々と夏を歌う。

この詩は全80行で「不滅の鳥」という永遠の至福の象徴と、時間的な現実の「美」とか「愛」の悲惨さを対照せたものであります。ここではナイチンゲールがずっと詩人のテーマとなってきたことの例を示すだけにとどめます。

さて上記のようなイギリス文学の流れの中で、ワイルドによって描かれたナイチンゲールは、どのような特色があるのだろうか。下に引用するのはナイチンゲールが貧しい学生のために赤い薔薇をつくる最高潮の場面である。

....And when the Moon shone in the heavens the Nightingale flew to the Rose-tree, and set her breast against the thorn. All night long she sang, with her breast against the thorn, and the cold crystal Moon leaned down and listened. All night long she sang, and the thorn went deeper and deeper into her breast, and her lifeblood ebbed away from her.<sup>2)</sup>

.....そして空に月が輝いた時、ナイチンゲールは薔薇の木所に飛んでいった。そして刺に胸を押しあてた。一晩中ナイチンゲールは、棘に胸を押しあてたままで歌った。すると冷たい水晶のような月は、かがみこんで耳を傾けました。一晩中ナイチンゲールは歌いました。すると棘はだんだん深く胸に刺さって行きました。そして生き血は、しだいにその体から失なわれていくのでした。

この描写は読者に強い感銘を与えて、捕らえて放さない。白い月、真紅の薔薇とナイチンゲールという色彩感覚の豊かな描写である。ペルシアの伝説に、

The bulbul fell in love with a white rose and sang till he died on its thorn, staining it red with blood.<sup>3)</sup>

白い薔薇に恋をしたブルブル(ナイチンゲール)は、棘に体を押し付けて死ぬまで歌い、白い薔薇を赤く染めた。

という話がある。薔薇がペルシア源産であること、真紅の薔薇と血の色、薔薇の開花時期とナイチンゲールの囀る繁殖期等を考え合わせれば、薔薇とナイチンゲールの話が必然的に生まれたことが分かる。ゆえに、この薔薇とナイチンゲールに関する話はペルシアの詩人達によって詠まれ続けられてきた。特に上記引用の描写は、ペルシアの抒情詩人ハーフィズの抒情詩(ghazal)で良く知られている。現在イ

ラン人の家庭で『ハーフィズ詩集』を備えていない家庭はないと言われ、多くのペルシア詩人の中で、ハーフィズは最も愛唱、愛好されている詩人である。

ハーフィズは本名をシャムス・ウッディーン・ムハンマドといい、「ハーフィズ」という筆名を用いた。この筆名は「コーランの暗記者」を意味する言葉である。また、シーラーズ（Shiraz）に住んでいたのも、「シーラーズのハーフィズ」とも呼ばれた。彼の名声は既に生前に在りて東方諸国に広まり、トルコ、インドはもとより中央アジアの隅々まで彼の作品は人々に愛誦された。

ヨーロッパには17世紀後半からラテン語の抄訳等で紹介されていた。のちハンマー・プルクシュタル（J. von Hammer-Purgstall）の翻訳（1812-3）などによってヨーロッパ諸国にも紹介されて一躍して世界文学の最高位に置かれるに至った。ゲーテ（Goethe, 1749-1832）が晩年に彼の詩に接して異常な感動を受け、いわゆる第二の青春、マリアンネ・フォン・ヴィレマーとの恋愛を記念する『西東詩集』（*Westöstlicher Divan*, 1816）を生んだことは有名である。

ではワイルドに大きな影響を与え、童話を書かしたというハーフィズの抒情詩の第130を英語訳で引用したい。

I walked within a garden fair  
At dawn, to gather roses there;  
When suddenly sounded in the dale  
The singing of a nightingale.

明け方、私が花園を歩っていた時、  
そこには薔薇が咲いていた。  
すると、突然谷間より、  
ナイチンゲールの歌が聞こえた。

Alas, he loved a rose, like me,  
And he, too, loved in agony;  
Tumbling upon the mead he sent  
The cataract of his lament.

ああ、彼は薔薇を愛した。私の様に、  
彼もまた、愛の苦悶に落ちたのだ。  
彼が草原に身を投げ出すと、  
彼の嘆きの迸り。

With sad and meditative pace  
I wandered in that flowery place,  
And thought upon the tragic tale  
Of love, and rose, and nightingale.

悲しみと、沈思の歩みで  
私はその花床を彷徨った。  
薔薇とナイチンゲールの愛の、  
悲劇の話を、思い浮かべて。

The rose was lovely, as I tell;  
The nightingale he loved her well;  
He with no other love could live,  
And she no kindly word would give.

その薔薇は美しかったと言いましょう。  
そのナイチンゲールは薔薇を愛した。  
彼は薔薇なしでは、生きられません、  
彼女の優しい言葉は、なかったが。

It moved me strangely, as I heard  
The singing of that passionate bird;  
So much it moved me, I could not  
Endure the burden of his throat.

聞いた時、不思議と、私の心を動かした、  
その情熱の鳥の歌声は。  
その歌は、私の心を、激しく揺さぶり、  
私には、喉からの苦悩の歌は、堪え難かった。

Full many a fair and fragrant rose  
Within the garden freshly blows,  
Yet not a bloom was ever torn  
Without the wounding of the thorn.

美しさに満ち溢れた、芳香の薔薇  
その花園には、爽やかな風が吹く。  
だが、花の蕾は開きはしない、  
薔薇の棘の傷無くしては。

Think not, O Hafiz, any cheer  
To gain of Fortunés wheeling sphere;  
Fate has a thousand turns of ill,  
And never a tremor of good will.<sup>4)</sup>

おおハーフィズよ、どんな慰めも思うな、  
運命の女神を、手にいれようなんて。  
運命の女神は酷い仕打ちを秘めている、  
それは、善意の震えでは、決してない。

前記引用のペルシアの伝説と、ハーフィズの抒情詩の中のナイチンゲールは、heという代名詞が用いられることからナイチンゲールは男性である。しかしワイルドのナイチンゲールはshe が用いられているので女性である点が、異なっている。

なぜワイルドの「ナイチンゲールと薔薇」がハーフィズの影響を受けていると特定したかということ、ワイルドが1894年11月9日付でアルフレッド・ダグラスに宛てた手紙に、

……I am sending you a copy of Hafiz the divinest of poets. I hope the honey of his verse may charm you.<sup>5)</sup>

……すばらし詩人ハーフィズの詩集を、一部お送りいたします。彼の素敵なお詩は貴方を魅了する事と思います。

というものがあるからである。この文面からワイルド自身がハーフィズに魅了されていることがわかる。またレディング監獄からロバート・ロスへの1897年4月6日付の手紙でも、出獄した後に読む本を、40冊程手配したリストの中に、マッカーシ (J.H.M'Carthy) の英語訳と思われる『ハーフィズ詩集』<sup>6)</sup>の名前が見られる。このことからワイルドのハーフィズへの傾倒ぶりと、以前からハーフィズの詩に親しんでいたことは明白である。ゲーテ同様に『ハーフィズの詩集』からヨーロッパの文学に無いものを感じ取ったに違いない。だが、ワイルドが「ナイチンゲールと薔薇」を書く以前に誰の翻訳で読んだかは特定できない。

## 歌

月の青白さ、白い薔薇、真紅の薔薇とナイチンゲールの揃った、この場面は読者の心に焼き付いてしまう。これらのものを結合し昇華させるものが、ナイチンゲールの歌である。その歌とは、

……She sang first of the birth of love in the heart of a boy and a girl.<sup>7)</sup>

……ナイチンゲールはまず初めに、少年と少女の胸の中に生まれる愛の歌を歌った。

……She sang of the birth of passion in the soul of *a man and a maid*.<sup>8)</sup>

筆者斜体

……ナイチンゲールは若者と娘の魂の中の情熱の誕生を歌った。

……She sang of the Love that is perfected by Death, of the Love that dies not in the tomb.<sup>9)</sup>

……ナイチンゲールは死によって完成される愛を、お墓の中でも死なない愛の歌を歌ったからでした。

と言うように、あまりにも純粹可憐な歌なのである。ワイルドはこの歌を一晩中ナイチンゲールに歌わせ続けるのである。

……Then she gave one last burst of music.<sup>10)</sup>

……そしてナイチンゲールは最後の一曲をひときわ高い声で歌った。

これが薔薇の花の完成でありナイチンゲールの最後のときである。このナイチンゲールの歌はキーツの「ギリシャのオード」(“Ode on a Grecian Urn”)と一脈するものがある。

Heard melodies are sweet, but those unheard	聞こえる調べは美しく、耳に響かぬ音楽は
Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on;	更に美しい、さあその静かな笛をふいておくれ。
Not to the sensual ear, but, more endear'd,	感覚の耳にでなく、もっとしんみりと
Pipe to the spirit ditties of no tone : <sup>11)</sup>	こころに向けて吹きならせ、音のない歌を

キーツの詩の世界と同様に、ワイルドの散文で描かれたこのナイチンゲールと赤い薔薇の場面は読者の心に結晶する。

## 愛

「ナイチンゲールと薔薇」は色々な愛の形を描いていると言われるが、作品中ではどのように表現されているのだろうか。

…… “Be happy,” cried the Nightingale, “be happy; you shall have your red rose. I will build it out of music by moonlight, and stain it with my own heart’s - blood. All that I ask of you in return is that you will be *a true lover*, for *Love* is wiser than Philosophy, though he is wise, and mightier than Power, though he is mighty. Flame - coloured are his wings, and coloured like flame is his body. His lips are sweet as honey, and his breath is like frankincense.”<sup>12)</sup> 斜体著者

…… 「お幸せに」、とナイチンゲールは叫びました。「お幸せに、お望みの赤い薔薇を差し上げましょう。それを月光を浴びながら音楽から作りだし、私の心臓の血で染めてあげましょう。そのかわりにあなたにお願いしたいのは、真実の愛する人になってくださることです。というのは、愛は哲学より賢いのですもの、哲学も賢くはありますけれど。また、愛は権力より強いのですもの、権力もちろん強いですが。愛の翼は炎の色をしていますし、その体も炎のような色をしています。愛の唇は蜂蜜のように甘く、その息は乳香のようにすばらしいですわ。」

ナイチンゲールの言っている「愛」、あるいは「真実の愛する人」は、ハーフィズの影響を考えると簡単には断定できない。だが、『ハーフィズ詩集』のペルシア語からの邦訳者黒柳恒男氏は、「ハーフィズの抒情詩は単に地上的な恋愛詩たるにとどまるものでなく、その内面には真の恋人たる神に対する切々たる愛、思慕の情が秘められている。」<sup>13)</sup>と述べているのが適切な解釈だと思う。ワイルドがハーフィズの影響を受け、傾倒したのは宗教の問題もあると思う。キリスト教とイスラム教の違いはあるが、ワイルドとハーフィズの神に対する距離のとりかたに共通しているものがある。きっとそのような所にワイルドの大きな共感があったのだと思う。

## 結 語

ペルシャが原産と言われている薔薇は真紅の薔薇と一緒に、ナイチンゲールの血染の薔薇の伝説も合わせてヨーロッパに伝えたと考えられる。特にナイチンゲールの鳴く季節と薔薇の咲く時期が重なっていることもナイチンゲールと薔薇の話に弾みを付けていることと思う。イギリスでは、ギリシャ・ローマ神話の影響等の要因が混ざり合い、詩人達に描かれてきたナイチンゲールの詩の土壌があつた。その中で、キーツに芽生えた唯美主義が『ハーフィズ詩集』のワイルドへの大きな影響の下で、それまでイギリス文学の中で描かれてきたものとは異質の幻想美の世界が、このワイルドの童話の中に結実したといえよう。

## Notes

- 1) Jack Stillinger, ed., *The Poems of John Keats* (Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1978), p.369. "Ode to a Nightingale" l. 7-10.
- 2) J.B.Foreman, ed., *The Complete Works of Oscar Wilde* (London and Glasgow : Collins, 1990), p.294. ll.39-44.
- 3) Ad de Vries, ed., *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam and London : North-Holland, 1984), p.341.
- 4) A.J.Arberry, trans., *Fifty Poems of Hafiz* (1953 ; rpt. Richmond: Curzon Press, 1993), pp.127-8.
- 5) Rupert Hart-Davis, ed., *The Letters of Oscar Wilde* (London : Rupert Hart-Davis, 1962), p. 377.
- 6) *Ibid.*, p.523. Translation of Hafiz, and of oriental love-potry. [Perhaps *Ghazels from the Divan of Hafiz*, done into English by J.H.M'Carthy (David Nutt, 1893)]
- 7) J.B.Foreman, ed., *The Complete Works of Oscar Wilde*, p. 294.l.45.
- 8) *Ibid.*, p. 295. ll. 8-9. [*a man and a maid*を朗読するとmermaidとも発音できる。するとこの意味は人魚の魂の中の情熱の誕生となる。ワイルドの作品中には多々このような仕掛がある。]
- 9) *Ibid.*, p., 295. ll.20-1.
- 10) *Ibid.*, p. 295. l. 30.
- 11) Jack Stillinger, ed., *The Poems of John Keats*, p.372. ll.11-14.
- 12) J.B.Foreman, ed., *The Complete Works of Oscar Wilde*, p.294. ll.12-9.
- 13) 黒柳恒夫訳『ハーフィズ詩集』(東京：平凡社、1976) p.394.

(本学専任講師)